



疑問をもつこと

校長 清水 一司

ベートーヴェン作曲の交響曲第5番は、冒頭の旋律を「このように運命は扉をたたく」と自身が語ったというエピソードから「運命」と呼ばれるようになりました。先日、2年生とともにさいたま市小・中学校管弦楽鑑賞教室に参加し「運命」をフルオーケストラで聴く機会を得ました。シンプルかつインパクトある冒頭の旋律は、確かに運命が扉をたたいているように感じます。作曲から200年以上経っているというのに、いつの間にか私はベートーヴェンと対話しているような気分になっていました。

ところが音楽を味わいながら「本当に作曲者の意図を正確に再現しているのだろうか？」という疑問が生じてきました。音楽は「音」という抽象的なものを媒体としています。絵画や彫刻、文学作品のように、具体的な形として現在に残る芸術ではないだけに、私たちは作曲された当時の音や響きを的確に知ることができません。さらに私たちは、「今を生きる演奏者の感性」というフィルターをとおして再現された音楽しか聴くことができないのです。今回鑑賞した「運命」も、ベートーヴェンがどのような演奏上の結果を想定して作曲したのかを私たちが完全に知ることは不可能なのです。今回の疑問は、私にとって音楽をさらに深く考えるきっかけとなりました。

さて、6月19日から2泊3日で3年生とともに京都・奈良方面に修学旅行に行ってきます。歴史の舞台や文学の世界、仏教美術などを生み出した空間を観たり体験したりできる絶好の機会です。生徒たちはこれまでの学習内容が実感を伴って理解できることでしょう。

ところで、奈良・東大寺の東塔の高さは70mだったとする調査結果が奈良文化財研究所から発表されました。奈良時代の東大寺には、大仏殿の東西にそれぞれ七重塔があったことがわかっています。しかし、平安時代に西塔は落雷で焼失、東塔は平氏の焼き討ちで焼失しています。東塔は鎌倉時代に再建されたものの、1362年に落雷で再び焼け落ちています。この東塔について、創建時の高さが約70mなのか約100mなのか、長年議論となっていました。それというのも、江戸時代の学者が23丈(約70m)を33丈(約100m)と書き間違えた文献を作ったからだそうです。今回のことについて東大寺は、「天平の東塔の姿が知りたいとの思いに一つの答えをいただいた。」と語っています。「東塔の本来の姿はどのようなものだったのか？」という疑問が真実に迫るきっかけになったのでしょうか。

「大切なのは疑問をもち続けることである。」とアインシュタインは語っています。「本当かな?」「真実は何だろう?」などと疑問をもつことが思考の第一歩になります。子どもの考える力を伸ばすために、子どもが疑問をもてるようにすることも心掛けたいものです。